

## はじめに

本書は、2010年度から2015年度にかけて、毎年一度、日本女子大学で開催された、日本語教育をめぐる公開シンポジウムの発表をまとめたものである。本シンポジウムは日本女子大学文学部学術交流企画主催、日本語用例文データベース『はごろも』研究会共催で行った。一貫したテーマとして、「授業で習ったはずなのに学習者が使えるようにならない日本語の文法項目」をとりあげ、それらについて、分析方法を考える、指導法を提案する、など、どのような方法を使えば学習者が使えるようになるかを考えてきた。「授業で習ったはずなのに学習者が使えるようにならない」という表現には、学習者が習ったことを使って自在に自己表現し、各自の目的を達成できるようになってほしいという日本語教師の願いと、それを支援することが言語教育の使命であるという思いを込めている。

本書の論考では、主に文法、談話研究、誤用分析、日本語用例文データベースなどを取り上げる。前半の8編は文法項目の分析と授業での取り上げ方など教授に関する論文、後半の2編は学習者の産出に焦点を当てた論文である。

砂川有里子・清水由貴子「台湾の大学生による名詞述語文の習得状況——日本語学習者作文コーパス LARP at SCU と教科書の調査に基づいて——」は、台湾の東呉大学が構築した学習者作文コーパスである LARP at SCU を用いて「～は～だ」「～が～だ」などの形式の文、「～とは～だ」「～というのは～ということだ」などの定義文が学習者にどのように使われているかを調査し、彼らが使ったと思われる教科書との関連、使用数と誤用数の学年の進行にともなう変化についての分析が

ら、学習者にとって習得が難しい名詞述語文のタイプを明らかにした論考である。

太田陽子「『文脈化』という視点——「～である」の練習の検討を例に——」は、学習者がある表現が使えない原因の一つとして、ある表現を「いつ、どのように使うのか」という文脈についての情報が正しく伝えられていないという問題があると指摘している。そして、教える際には、「どういう意味を表すか」だけでなく、ほかの表現がある中でその表現を用いて表す必然性があるのはどんな時か、ということ伝える必要性があるという問題意識に立ち、「文脈化」という視点を教師が持つことの重要性について述べている。

高梨信乃「意志表現の扱いをめぐる」は、「しよう・しようと思う・しようか・する・するつもりだ・したい・したいと思う」などの意志を表す表現について、それぞれがどのように使い分けられるかをいくつかの観点から分類し、日本語教科書での扱いを調べることにより、どこに問題があるかを述べたものである。

増田真理子「日本語教育における「んですけど。」の扱い——自然な日本語を積み上げる教育実践の一例として——」は、自然会話コーパスに高頻度で出現する「んですけど」という形が学習者コーパスには現れにくいことの原因は、この形を従属節で使う前置きの用法を中心に扱う現行の教え方にあると指摘する。その解決として、「んですけど。」と他者に働きかける言いさしの形を先行して、そこから「んです。」や複文形式の「んですけど、～」に拡張していく方法を提案する。

江田すみれ「徐々に起こる複数の事態の変化を表す「ようになる」——動詞の性質と誤用の関係——」は、初級教科書で、習慣・能力が身につくという意味で指導されることが多い「ようになる」を、「徐々に起こる複数の事態による変化」と捉えなおすことを提案している。初級教科書で「ようになる」とともによく提示される可能表現は、複数の事態が関係するという「ようになる」の特性に気づきにくい形であり、初級で「可能表現+ようになる」だけを教えることは「ようになる」の誤用を生みやすい形式を与えている可能性があるとして述べている。

蓮沼昭子「順接と逆接の境界——日本語学習者は逆接条件の「テモ」になぜ順接条件形式を使用するのか——」は、日本語で「テモ」節を使う場面を外国語で順接条件形を使って表現する場面があることを取り上げる。日本語・中国語・韓国語・その他の言語の学習者を対象に条件文に「タラ・バ・テモ」などを入れさせる実験を行い、その結果から、学習者がどのような考えに基づいて「テモ」を選択しないか、原因を分析する。

牧原功「丁寧さと関わる文法——配慮という観点から文法を見なおす——」は、文法的には正しくても実際の運用という点では不適切な場合がある例を問題にしている。丁寧さの観点から、テンス・アスペクト、ボイス、引用、相手に働きかけるムードに関わる事例をとりあげ、それらについて分析している。

堀恵子「機能語用例文データベース「はごろも」の文法項目の難易度——主に旧『日本語能力試験出題基準』との比較から——」は、2015年に公開された機能語用例文データベース「はごろも」について、システム開発の目的とその背景、ウェブシステムで提供する情報、文法項目の選択と難易度レベル付与、コーパスの用例を紹介する。その上で、「はごろも」の文法項目に対して、経験豊富な日本語教師による主観判定の結果付与された6段階の難易度に関して、旧日本語能力試験の『出題基準』と比較しながら分析している。

以上8編が文法に関する論文である。

残りの2つの論文は主に学習者の産出に関する論文である。

石黒圭「談話研究からみた話し方教育への示唆——学習者は接続詞をどのように習得するか——」は話し言葉、それも独話を対象に、学習者が接続詞をどのように習得しているかを調査した。中国人学習者の3年生、4年生、母語話者にストーリーテリングと旅行の思い出という二つの独話をしてもらい、学年と日本への留学経験からそれを分析している。

仁科喜久子ほか「誤用分析からみた作文指導への示唆」は、氏の研究会が構築し、誤用タグをつけて2013年にWeb上で公開した学習者作

文コーパス「なたね」を用いて誤用分析の例をあげ、それを通してどのような項目が、なぜ習得できていないのかという問題点を明らかにし、その対策方法を検討している。

以上、公開シンポジウムの発表を基に、論文として読みやすさを重視し、文法項目をわかりやすく解き、学習者の用例など具体例を多く取り入れ、幅広く日本語教育に携わる方々に読んでいただけるよう改稿を重ねた論文揃いである。学習者が「使えるようになる」ためにはどうすればよいかということに関する、有益な示唆に富むものと確信している。このような研究が学習者の日本語習得に多少なりとも助けになることを願ってやまない。

2017年8月

江田すみれ・堀恵子

## 目次

## 【文法編】

台湾の大学生による名詞述語文の習得状況 —日本語学習者作文コーパス LARP at SCU と教科書の調査に基づいて— 砂川有里子・清水由貴子……………	1
「文脈化」という視点—「～てある」の練習の検討を例に— 太田陽子……………	25
意志表現の扱いをめぐって 高梨信乃……………	45
日本語教育における「んですけど。」の扱い —自然な日本語を積み上げる教育実践の一例として— 増田真理子……………	65
徐々に起こる複数の事態の変化を表す「ようになる」 —動詞の性質と誤用の関係— 江田すみれ……………	93
順接と逆接の境界 —日本語学習者は逆接条件の「テモ」になぜ順接条件形式を使用するのか— 蓮沼昭子……………	119

丁寧さと関わる文法 —配慮という観点から文法を見なおす— 牧原 功	147
---	-----

機能語用例文データベース「はごろも」の文法項目の難易度 —主に旧『日本語能力試験出題基準』との比較から— 堀 恵子	167
---	-----

### 【産出編】

談話研究からみた話し方教育への示唆 —学習者は接続詞をどのように習得するか— 石黒 圭	195
---	-----

誤用分析からみた作文指導への示唆 仁科喜久子・八木 豊・阿辺川武・ホドシチェク ボル	211
---	-----

執筆者一覧	233
-------	-----

# 台湾の大学生による名詞述語文の習得状況

— 日本語学習者作文コーパス LARP at SCU と教科書の調査に基づいて —

砂川有里子・清水由貴子

## 1. はじめに

### 1.1 名詞述語文の誤用

「私は〇〇大学の学生です」「これは〇〇です」「今何時ですか」のように、述語が「名詞＋助動詞ダ」の形を持つ文は「名詞述語文」と呼ばれ、動詞を述語とする「動詞述語文」や形容詞を述語とする「形容詞述語文」と区別されている。日本語の教科書では、多くの場合、動詞述語文や形容詞述語文よりも先に名詞述語文が導入され、文型としては「～は～だ」という形が示される。この文型は導入された後も教科書の本文などにしばしば登場するため、学習者には初期の段階から馴染みの文型として頻繁に使われるようになる。

しかし、学習者がこの文型を正しく使えるかという点必ずしもそうではない。例えば、「私の一日」という題目の作文で、一日の出来事をあれこれ述べた後、その作文の結びの言葉として「これは私の一日です」という文が使われたりする。このような場合、「これが私の一日です」のように「～が～だ」という文型を使って文章を終わらせるのが適当だと思われる。この種の誤用は、「～が～だ」の文型を習っていないので既習の「～は～だ」という文型を使ってしまったために生じた可能性がある。この例のように、未習の文型が使えないことによる誤用であるのなら、問題の文型が導入され、使えるようにさえなれば、誤用は解消す

# 「文脈化」という視点

— 「～である」の練習の検討を例に —

太田陽子

## 1. はじめに

学習者がある表現について「習ったはずなのに使えない」のには、さまざまな原因が考えられるが、その一因として、教える際に、その表現を「どんなときに使うのか」ということが本当の意味で扱われていないことがあるのではないだろうか。この論文では、そうした問題意識にもとづき、習得が難しい項目とされる「他動詞＋である」(以下「である」という表現の練習方法の検討を通して、現行の文法練習に加えるべき視点を考える。

まず、次節では、現行の文法指導の課題を確認しつつ、「である」の練習例について検討する。つづく3節では、2節での検討をふまえ、「である」の運用のために必要な視点を整理する。そして、4節で「である」の練習の改善案を提案し、5節で「である」に限らず、ある表現を「使える」ように指導するためのひとつの方法として、「文脈化」という考え方についてまとめていく。

## 2. 「文法指導」の課題と現在の教え方—「である」を例に

### 2.1 現在の文法指導における課題

現在の教育現場では、特に、文法・表現練習に関して、おおまかに2つの立場が設定できるだろう。1つは構造シラバスに基づく「文型

## 意志表現の扱いをめぐって

高梨信乃

### 1. はじめに

話し手自身の行為についての意志を表す表現は意志表現と呼ばれる。日本語において基本的な意志表現といえば、何か。もしこんな質問を受けたら、多くの学習者や日本語教師が挙げるのは、次の下線部のような表現ではないだろうか。

(1) 夕食はすきやきにしよう。(動詞の意向形「しよう」)

(2) 夕食はすきやきにしようと思います。

(「しよう」 + 「と思う」)

(3) 夕食はすきやきにするつもりです。(「するつもりだ」)

しかし、これらは互いにどのように違い、どのように使い分けるのかと問われたら、答えはそう簡単ではない。

また、意志は(4)のような動詞の基本形「する」でも表すことができる。(4)は(1)～(3)とどう違うのだろうか。

(4) 夕食はすきやきにします。(動詞の基本形「する」)

さらに、(5)のような表現は通常、希望表現と呼ばれ、意志とは別に扱われているが、(2)と同じ場面において近い意味で使われることがある。両者はどう異なるのだろうか。

(5) 夕食はすきやきにしたいと思います。

(「したい」 + 「と思う」)

# 日本語教育における「んですけど。」の扱い

— 自然な日本語を積み上げる教育実践の一例として —

増田真理子

## 1. はじめに

本稿の関心は、「んですけど」「んですが」といった表現の日本語教育での扱いにある。まず、(1)をごらんいただきたい。(1)は、自然会話(電話)における同一人物の発話(対話者の発話記録はない)であるが、わずか5つの発話中に、こうした形が3回も使われている。

(1) 9282 あの、きのうお借りした雑誌を返しにうかがいたいんですがー。

9283 いいですかー↑、

9284 あ、あの一、でー、別件なんですけどー。

9285 きんの借りた一、雑誌の違う号のですねー。

9286 えー、違う号に、ちょっと載ってるーと思われる論文、をちょっと調べていただきたいんですけどー。

(現代日本語研究会編『男性のことは・職場編』、ひつじ書房)

この「んですけど」類を問題にするのは、会話において高頻度で使われる形(2節参照)でありながら、「んです(のだ)」を初級段階で教えることの是非についての議論の影に隠れ、正当な項目として扱われずに放置されている現状があるからであり、また、学習者が必ずしもこれを効果的に使えていないという問題意識があるからでもある。

なお、ここで「んですけど」類と呼ぶものは、「んです」「のです」

# 徐々に起こる複数の事態の変化を表す「ようになる」

— 動詞の性質と誤用の関係 —

江田すみれ

## 1. はじめに

「ようになる」は誤用が見られる形である。

- ×(1) そのけっか大学も日本語をせんもんでせんたくするようになって、日本のりゅがくもかんがえることができるりゅうだ。(→選択して) (作文)

本稿は、「ようになる」を「時間をかけて習慣・能力が身につく(市川2005:240)」と教える教え方だけでは意味の把握が十分でないことを述べ、共起する動詞についてもっと整理する必要があるということを提案する。そして、「ようになる」の基本的な意味は、徐々に起こる変化、複数の事態による変化であるということを述べる。

日本語母語話者、学習者が「ようになる」をどのように使っているか、書き言葉・話し言葉のコーパスを用いて調査し、それらの結果から学習者の誤用の原因を探る。その際、日本語教科書の扱い方も参考にした。

2節で先行研究を紹介し、3節で調査方法を述べる。4節で日本語教科書での扱い、5節・6節で母語話者の「ようになる」の使用状況、7節で学習者の誤用を述べ、8節で学習者の誤用の分析と考察を行い、9節で変化の表現と動詞の種類についてまとめる。

# 徐々に起こる複数の事態の変化を表す「ようになる」

— 動詞の性質と誤用の関係 —

江田すみれ

## 1. はじめに

「ようになる」は誤用が見られる形である。

- ×(1) そのけっか大学も日本語をせんもんでせんたくするようになって、日本のりゅがくもかんがえることができるりゅうだ。(→選択して) (作文)

本稿は、「ようになる」を「時間をかけて習慣・能力が身につく(市川2005:240)」と教える教え方だけでは意味の把握が十分でないことを述べ、共起する動詞についてもっと整理する必要があるということを提案する。そして、「ようになる」の基本的な意味は、徐々に起こる変化、複数の事態による変化であるということを述べる。

日本語母語話者、学習者が「ようになる」をどのように使っているか、書き言葉・話し言葉のコーパスを用いて調査し、それらの結果から学習者の誤用の原因を探る。その際、日本語教科書の扱い方も参考にした。

2節で先行研究を紹介し、3節で調査方法を述べる。4節で日本語教科書での扱い、5節・6節で母語話者の「ようになる」の使用状況、7節で学習者の誤用を述べ、8節で学習者の誤用の分析と考察を行い、9節で変化の表現と動詞の種類についてまとめる。

## 順接と逆接の境界

— 日本語学習者は逆接条件の「テモ」になぜ順接条件形式を使用するのか —

蓮沼昭子

### 1. はじめに

日本語の逆接条件を表す「テモ」に対し、外国語では順接条件を使用するほうが自然な場合がある。例えば、以下の(1)～(3)がそうした例で、それぞれ、バスの停留所で待っている人に助言をするという文脈での発話である。

- (1) a ここで待っていても, バスは来ませんよ(=バスには乗れませんよ)。あちらでお待ちにならないと…  
 b?? ここで待って {いれば/いたら}, バスは来ませんよ。
- (2) a #Even if you wait here, the bus won't pick you up.  
 (藤井 2002 の例。# は文法的には可能だが、この文脈では不適切な文であることを示す。以下同様)  
 b If you wait here, the bus won't pick you up.  
 [直訳: ここで待っていれば, バスには乗れませんよ。]
- (3) a 你在这等, 车也不会来的。  
 [ここで待っていても, バスは来ないでしょう。]  
 b (如果)你在这等的话, 会搭不到车的。  
 [(もし)ここで待って {いれば/いたら}, バスに乗れないでしょう。]

(1a)の日本語の例では、「テモ」を使うのが自然であり、順接条件の

# 丁寧さと関わる文法

— 配慮という観点から文法を見なおす —

牧原 功

## 1. はじめに

日本語の教育現場では、教師は主に学習者が正確な日本語を産出できるようにすることを目的として、日本語の教育にあたるといっていだらう。この場合の、「正確な」日本語とは、多くの場合正確な文法であり、ある場合は正確な発音であると思われる。

より高度な知識を積み上げていくためには、既習の習得事項を高い確度で定着させていくことが必要となり、そのために文法や音声の正確さを要求するということは間違いなく重要なことである。

しかしながら、その一方で、日常会話ができればよい、高度な言語知識は必要ではないという学習者が存在することも確かであり、その場合、初級の文法項目は、さらに言語習得を進めるための基礎というよりも、言語運用を行う際の重要なツールとなる。

筆者が大学で日本語を教えていて、ほぼ毎年のように留学生から耳にする発話に、「先生もパーティーに来たいですか？」というようなタイプのものがある。相手の意向をたずねるのであるから、「～たいですか？」を使うのは文法的—正確に言えば統語的、つまり語と語を正しく組み合わせ、語と語のつながりや、文の表す機能という点で間違いのない文を作るという意味—には正しいのだが、しかし、実際には聞き手に対してある種の失礼な感じを与えてしまい、言語の適切な運用を行う

# 機能語用例文データベース「はごろも」の文法項目の難易度

— 主に旧『日本語能力試験出題基準』との比較から —

堀 恵子

## 1. 機能語用例文データベース「はごろも」とは

機能語用例文データベース「はごろも」(以下, 「はごろも」)は, 文法項目の用例を, 実際の話し言葉, 書き言葉から抽出し, 項目の意味, 難易度, 旧日本語能力試験の『出題基準』(以下, 旧『出題基準』)の級, 参考書のページ情報などとともにウェブ上で表示するシステムである。2015年から公開しており, 用例以外はエクセル形式でダウンロードでき, 教育, 研究に利用できる(堀ほか2016)。このプロジェクトは筆者だけの成果ではなく, 多くの研究者の共同作業で成り立っている。

本節では「はごろも」の概要の説明として, システム開発の目的とその背景, ウェブシステムで提供する情報, 文法項目の選択と難易度レベル付与, コーパスの用例について紹介する。2節では旧『出題基準』にある項目の級と「はごろも」での項目難易度を比較し, 難易度付与に関わった日本語教師の意識や「はごろも」の特徴について述べる。3節では, 旧『出題基準』にないが, 「はごろも」に入れられた項目の難易度から, 同様に日本語教師の意識や「はごろも」の特徴の記述を試みる。4節はまとめと今後の課題である。

### 1.1 開発の目的

「はごろも」開発の目的は, 日本語教師, とくに海外における非母語話者日本語教師支援と, 中上級以上の学習者の自律学習支援である。

# 談話研究からみた話し方教育への示唆

— 学習者は接続詞をどのように習得するか —

石黒 圭

## 1. はじめに

本稿は、中国語を母語とする日本語学習者が話し言葉の接続詞をどのように習得するのか、その習得の実態を観察することで、話し言葉教育への示唆を得ることを目的としている。

日本語学習者は、長期にわたる日本語学習の過程のなかで日本語の話し方を徐々に身につけていく。しかし、初級の総合教科書では対話の話し方教育が、中級の総合日本語教育では文章の読み書きの教育が、それぞれ暗黙の前提となっていることが多く、中上級レベルでの話し方教育、とくにスピーチやプレゼンテーションに役に立つ独話の話し方教育がすっぽり抜け落ちてしまっている。そのため、日本語母語話者の自然な話し方に接することが少ないJFL環境においては、日本語母語話者とはかなり異質な話し方のスタイルを身につけてしまうことがある。

たとえば、日本語の独話では、テ形やケド節をベースにした節連鎖構造(丸山2014)で話が続けられ、言いさし(白川2009)を頻繁に使うことが期待されるが、JFL環境の日本語学習者の場合、単文や、従属節をあまり含まない重文・複文で話し(近藤2004)、文末を完全文で言いきりがちである(朴2010)。そのため、母語話者が聞くと、ぶつぶつ切れるような話し方をするという印象をもたれがちである。また、モダリティ表現を用いた談話の管理が苦手で、終助詞の使い方が不自然なこと

## 誤用分析からみた作文指導への示唆

仁科喜久子・八木 豊・阿辺川武・ホドシチェク ボル

### 1. はじめに

大学などで学ぶ日本語学習者は在学中にレポートや論文を書く必要がある。入学後の日本語学習は継続して行われる中で、大学の勉学に適したアカデミックな場面での言語理解と表現能力が要求される。大学入学時には上級の日本語能力に達していることが期待されているが、アカデミックな場面での日本語の運用には困難を感じる学習者が多い。大学の勉学では書き言葉の中でも専門用語やアカデミックな文体表現の知識が必要となる。学習者は一般に初級からの積み上げで会話を中心とした話し言葉を学んだ後に書き言葉へと進むため、上級レベルでもアカデミックな表現や文体の習熟度が必ずしも高いとは言えない。本稿では学習者の作文コーパスを利用した作文支援システムの視点からの誤用分析を通して、どのような項目がなぜ習得できていないのかという問題点を明らかにし、その対策方法を検討する。

本稿の構成は1節で研究背景と目的、2節で我々が開発した学習者コーパスの概要を述べ、3節で誤用分析の対象、内容、要因について例を示しながら概説する。続いて、4節では副詞、5節では接続表現について学習者コーパスと日本人によるオーセンティックなコーパスとを比較することで学習者作文の特徴を示し、6節で教授法への提案と全体のまとめを述べる。